

3月3日(月) Wien

- 9:10 Westbahnhof 到着
- 9:50 ホテル到着
- 10:35 ホテル発
- 10:55 地下鉄U1号線 Praterstern → Stephansplatz
- 11:00 Stephansdom 見学 . . . . . ①
- 11:40 最大級の書店 Morawa にて地図等購入
- 12:05 Hohermarkt, Ankeruhr 見学 . . . . . ②
- 12:15 Jerusalem Stiege 見学 . . . . . ③
- 12:25 Ruprechtskirche 外観見学
- 12:35 Morzinplatz にて昼食
- 13:10 S2号線 Schwedenplatz → Schottentor
- 13:25 Universität Wien 見学 . . . . . ④
- 13:45 稜堡の跡を見学
- 13:55 Rathaus・Burgtheater・Parlament 外観見学 . . . . . ⑤
- 14:15 Volksgarten 見学 . . . . . ⑥
- 14:25 Heldenplatz より新王宮の外観を見学 . . . . . ⑦
- 14:35 Maria Theresia 像・Naturhistorisches Museum・  
Kunsthistorisches Museum・Museumsquartier 外観見学 . . . . . ⑧
- 15:05 Burggarten 見学 . . . . . ⑨
- 15:20 Staatsoper 外観見学
- 15:35 Karlsplatz 駅舎の外観見学 . . . . . ⑩
- 15:45 Secession 外観見学
- 15:50 Naschmarkt 見学 . . . . . ⑪
- 16:45 地下鉄U4号線 Kettenbrückengasse → Heiligenstadt
- 17:05 Karl Marx Hof 外観見学 . . . . . ⑫

## ① Stephansdom (シュテファン大聖堂, シュテファン寺院)

地下鉄 Stephansplatz 駅から地上へ出るとすぐシュテファン大聖堂の外観が目に飛び込んでくる。137 mの高さを誇る北塔は修復中であったが、印象的な部分として正面入口の右側に「05」と刻まれた部分を確認することができた。「05」とは Österreich/Oesterreich (オーストリア) の最初の2文字「OE」を示すものであり、第二次世界大戦中にオーストリアの独立を意味する記号として使われていたものである。現在はガラスで覆われ風化が防がれてはいるが、あまり観光の対象として目立つものではないようだ。

大聖堂の地下にあるカタコンベにはハプスブルク家歴代皇帝の内臓が納められているが、今回の巡検では見学することができなかった。主祭壇は復活祭前ということで紫色の布で覆われていたが、身廊やステンドグラス多くの像など内部の装飾を見学することができた。

外観や内部の豪華さや観光客の多さから、ウィーン市街地、そしてウィーン観光の中心としてのシュテファン大聖堂の存在がうかがえた。



## ② Hohermarkt, Ankeruhr

Stephansdomの北部に位置するHohermarktは、かつて高台にあったことからその名がつけられ、13世紀頃までは魚市場、以降は交易の場として発展していた。Ankerという保険会社がこの広場の東端に設置したユーゲント様式のAnkeruhr（アンカー時計）には毎時0分に12組のウィーンに関わりのある人物が現れる。現在は市場としての役割は果たしていないが、このAnkeruhrが呼び物となり多くの観光客が訪れている様子が見受けられた。また、陸地に囲まれたウィーンにおいて船舶を対象とした保険会社がこのような時計を設置するまでに発展していたことから、かつてトリエステにいたるまで領土を広げたハプスブルク帝国の栄華を感じることができた。



裏側の表記から、1914年に造られたものであることが分かる。

### ③ Jerusalemstiege~Ruprechts kirche (エルサレムの階段~ルプレヒト教会)

Hohermarkt からドナウ運河へ向かい北上すると、一段高くなった場所に突き当たる。「エルサレムの階段」をのぼった先、かつてゲルマニアとの境でありドナウの周辺にあっていたこの高台には、ローマ人の集落が存在した。バーベンベルク、ハプスブルクの時代からはユダヤ人が多く住み、Judengasse (ユダヤ人小路) などの地名が現在も残されているが、現在はその地名やひっそりと残されたシナゴグからしかその面影をうかがうことができない。かつてはドナウの水運が交易の中心であったためにこの近辺で多くの市場が開かれていたが、19世紀になると鉄道が開通したため、市場は鉄道駅の近くへと位置をうつした。現在はユダヤ人集落と同様に、Salzgasse (塩小路) やFleischmarkt (肉市場) などの地名にのみ、その名残をみることができる。

さらにその高台を北へ進むと、現存するウィーン最古の教会である Ruprechts kirche がみえてくる。現在も音楽会などのイベントが開かれているようだが、ドナウ運河に面した旧市街の北端ともいえるこの場所には人どおりが少なく、観光客もそれほど多くは見られなかった。この教会の北側、かつてドナウ川が流れていた場所に現在のドナウ運河が流れており、さらに運河の北側には旧市街とは異なった趣の現代的なウィーンの姿を見ることができた。



(左) 1996年、エルサレム誕生3000年を祝いウィーン市によって名付けられた「エルサレムの階段」



#### ④ Ring, Universität Wien

19世紀、ウィーンでは1873年に開催されたウィーン万国博覧会に先んじて市街地の近代化を目指す大改造が行われた。建蔽率の増加や住環境の悪化に対応するため、さらにはハプスブルク帝国の首都として、帝国の理念と存在意義を内外へ示すことを目的とした都市の大改造であった。市街地を取り囲んでいた壁が撤去され、その跡地に建設されたRingと呼ばれる環状道路に沿って壮麗な公共建築物が配置された。それらの建築物の建築様式は歴史主義と呼ばれているが、それはネオ・ルネサンス様式（Universität Wien／ウィーン大学）やネオ・ゴシック様式（Rathaus／市庁舎）、バロック様式（Burgtheater／ブルク劇場）やギリシア・ルネサンス様式（Parlament／国会議事堂）など過去の歴史における建築様式を建築物の用途に応じて使い分けているが故に名付けられたものである。

今回の巡検ではかつて市壁に設けられていた4つの門のうちの1つ、Schotten Tor（ショットテン門）の名を残したトラムの駅からRingを南下した。移動中、Ringが片側3車線、加えて路面電車も走る巨大な環状道路であることを確認できた。



フランス風のVotivkirche（ヴォティーフ教会）を右手に見つ、かつてブルジョワ階級が賃貸用アパートを建てたオフィス街を歩いていくと、ネオ・ルネサンス様式のウィーン大学が見えてくる。かつてはハンガリーなども含んだ“国内”の能力ある知識人が集い、ジークムント・フロイトなどの著名人も多く輩出したヨーロッパ有数の大学である。内部では多くの学生が歴史ある建築物の中で過ごしている様子を見ることができた。大学の入口には豊富な経済力を示す鉄の門扉が置かれていて、細工の中にはハプスブルク家の紋章も確認できた。





また、ウィーン大学の前には Pasqualatihaus というベートーヴェンが過ごしたことで有名な場所があるが、そのアパートの前にかつてウィーンが設置していた稜堡の名残を見ることができた。金色の記念柱の奥にあるのが Pasqualatihaus を含むアパートで、そのアパートの建てられている場所が少し高くなっていることが確認できる。それがかつての稜堡の名残である。



## ⑤ Rathaus, Burgtheater, Parlament

さらに Ring を南下すると、Rathaus（市庁舎）とその手前に市庁舎広場を見ることができる。市庁舎はネオ・ゴシック様式で建てられており、市民の自治を示す目的でこの様式が選ばれたという。また、市庁舎広場も市民のための場所として利用されている。巡検で訪れた際には「WIENER EISTRaum」という企画が催されており、ウィーン市民と思われる人々がアイススケートを楽しんでいた。

また Ring を挟んだ東側には Burgtheater（ブルク劇場）を見ることができる。荘厳な外観が Ring の景観を際立たせるのに一役買っていることは間違いないだろう。



Dr.-K.-Renner- Dr.-K.-Luger Ring の南端には、ギリシア・ルネサンス様式で建てられた Parlament（国会議事堂）が建っている。この広大な国会議事堂からは帝国時代の議員の多さをうかがうことができた。





## ⑥ Volksgarten

国会議事堂の東側に位置する Volksgarten (フォルクス庭園) は市民開放型の庭園であった。Volk はドイツ語で国民・人民、あるいは大衆を意味する言葉である。1823年に造られたこの庭園を訪れる「市民」とは、労働者階級であるプロレタリアートから抜けだしたブルジョワジーであった。彼らはこういった庭園を訪れることで余暇のあるものとして経済力を示し、設置されたベンチに腰掛け議論することで知識を認め合っていた。また、こういった場所で同階級に所属する知人と出会っていったのである。

この庭園の北端にはエリーザベト皇妃の像が置かれている。このような国家を代表する人物の像は庭園や広場など人が集まる場所に置かれ、ナショナリズムの形成や歴史認識に役立っているという。多くの車や人が行きかう Ring と面しているにも関わらず、現在でもこの公園には穏やかな空気が流れているのを感じることができた。



エリーザベト像の視線に合わせると、何の障害物もなく新王宮を望むことができる。

## ⑦ Heldenplatz, Neue Burg

フォルクス庭園を南東の出口から出ると、Heldenplatz（英雄広場）に入り、目の前に巨大なNeue Burg（新王宮）がそびえたつ。新王宮は当初、現在残されているものとシンメトリーとなるような建築物が対となって建てられる予定だったが、予算の関係でその計画は不履行となった。その中止となった建築予定地に現在広がっているのが英雄広場である。英雄広場には、向かい合って2つの巨大な騎馬像が建っており、北側が対ナポレオン戦争で活躍したカール大公、南側に建っているのが対オスマントルコで活躍したオイゲン公の像となっている。これらの像は、それぞれの英雄が乗っている馬が後ろ脚2本だけで立っているのが特徴である。尾をつけることなく立っているこの像から、英雄の偉大さが主張されていることが感じられた。



新王宮はモニュメント的な要素が強く、実際の皇帝の執務などは全て旧王宮で行なわれていた。1938年に、この新王宮のバルコニーから英雄広場に集まったオーストリア国民へ向けてヒトラーが演説を行なったことも知られている。

## ⑧ Maria Theresia 像・Naturhistorisches Museum・Kunsthistorisches Museum・Museumsquartier

英雄広場・新王宮のリンクを挟んだ南西に、マリア・テレジア像を中心としてシンメトリーを形成する2つの新古典主義の建築物が見られる。北側にあるのが Naturhistorisches Museum（自然史博物館），南が Kunsthistorisches Museum（美術史博物館）であり，特に美術史博物館はヨーロッパ3大美術館のひとつといわれ，多くの著名芸術家の作品が並べられている。2001年にはかつての王宮厩舎を改築した Museumsquartier がオープンし，この一帯はウィーンの誇る博物館・美術館地区となった。こういった博物館や美術館は他のヨーロッパ諸都市と比較される際の重要な観点であり，特にプラハやブダペストが観光の対象として注目されるようになった1990年代以降ウィーンでは都市の景観に対して意識が高まったようである。巨大な建築物からハプスブルク家の栄華と，また訪れている観光客の数から観光都市として成功しているウィーンについて感じる事ができた。



## ⑨ Burggarten

かつては名前が Hofgarten（宮廷庭園）であった Burggarten は、ハプスブルク帝国時代には庶民が入ることができなかった場所である。広い敷地の中に著名人の像など多くのモニュメントが設置されており、ナショナリズム形成へ一定の役割を果たす場所であることが予想できた。しかしどこか物寂しい印象があり、市民の娯楽や息抜きの場として作られたものではないだろうと実際に足を運ぶことにより感じる事ができた。市民が散歩をしている様子も見受けられたフォルクス庭園と比較すればその差は明確であったように思われる。



## ⑩ Karlsplatz 駅舎, Secession

ウィーンを特性づけるものとしてハプスブルク家ともうひとつ、芸術家たちを挙げるができる。特に“世紀末ウィーン”と呼ばれる事象は有名である。その時代に活躍した人物としてオットー・ヴァーグナーを挙げるができるが、ウィーンの建築様式は彼に大きな影響を受けた。彼が設計したものとして Karlsplatz の駅舎を今回の巡検では訪れ、他の都市と比べてそれほど色彩が豊かではないウィーンのユークレント様式を実際にみる事ができた。



オットー・ヴァーグナーの影響を受けた芸術家たちは、19世紀末に Secession (分離派) を結成した。その会館が地元では「黄金のキャベツ」とも呼ばれている Secession (分離派会館) である。建てられた当時、奇抜であると評判を集めた Secession の前には巨大な観光バスが停車し、現在は芸術家たちの集まる場所とは別の役割として多くの観光客が集まる場所となっているようであった。



## ⑪ Naschmarkt

旧市街の北部を流れるドナウ運河とは異なり、自然に流れているウィーン川の上につつ市場が Naschmarkt である。水運を利用してトルコなどからやってきたものの、市街地の中へと入れなかった人々が集ったのが始まりとされるこの市場にはウィーンのもの、というよりはエスニックの商品が多く集まっているように感じられた。

多く見られたのは精肉と干した果物、さらに香辛料やアジアの雑貨などで、Karlsplatz から離れ南西に向かうにつれてエスニックの商品が多くなったように感じられた。



## ⑫ Karl Marx Hof

1920年代社会主義が台頭し「赤のウィーン」と呼ばれていた時代、貧民救済を目的として多くの公営住宅の建設が行なわれた。これらの建築物は装飾がなく、幅が1 km以上と非常に長い造りになっているが、これは社会主義の揺籃期に防御壁の意味も兼ねていたためである。その象徴的なものが地下鉄U4号線の終点HeiligenstadtにあるKarl Marx Hofである。今回訪れた際には、時刻が夕方であったということも影響しているのか、人気もなく非常にひっそりとしていた。



### 参考文献

川向正人監修 2004. 『世界の建築・街並みガイドー5 オーストリア／ポーランド／チェコ／スロヴァキア／ハンガリー／ルーマニア』 エクスナレッジ.

Matthias Settele. 1990. *WIENER DENKMÄLER*. : Perlen-Reihe.